「中流」という事

19世紀末にイタリアの経済学者パレートが
富の約 80%を上位約 20%の人口が保有している
という法則を発見して「パレートの法則」と呼ばれている事は有名だが
基本的には正規分布に従っており、
その応用であるイノベータ理論で言えば、
イノベータ層（2.5％）とアーリーアダプター層（13.5％）
で偏差値1σ以上の層と言える。

この所得格差の問題で11月15日、NHK がスペシャル番組で
「ふつうの暮らし」はどこへ？
中間層の老後資金・学費・生活費を読み解く
と題してスペシャル番組を放映した。

「ふつうの暮らし」を「中流」と置き換えるとその定義が難しいが、
最近、「K 字構造」と言われているように、両極端化しており、
「勝ち組」と「負け組」という風な分断化が進んでいる。

番組の「ふつうの暮らし」の定義が難しいが
所得だけでは測れない領域でもある。

特に団塊ジュニア世代は就職氷河期を経験しており
正規・非正規という分断軸もあるのも事実。

うちの息子たちは正にこの世代であり
長男は博士で大手企業に勤め、夫婦ともに裕福な所得で持ち家もある
次男は東京で中堅の建設機械製造会社に勤め、比較的安定した所得で持ち家もある
三男はリーマン・ショックで会社員からはみ出して、うちの会社で働いている
という三人三様だが正社員である状況だ。

この世代の直近の課題は結婚だが、
上2人は出来てそれぞれ2人の子供に恵まれており、
順に高校進学という時期に来て、
教育費の格差で進路が分かれる時期で
子供が「道筋」を見出せるまでの資金が課題だが

ムリをしなければ何とかなるという状況のようで大丈夫だが
残念ながら、三男は未婚のままでいる。

生活の基盤である収入の安定度の面で上２人は高いようであり、
住宅も京都と東京で持ち家だが、住宅ローンの固定金利は有難いが
変動金利の行方が気になるようだ。

三男は私の事業を承継しており、収入は比較的高い上に
私が相続した実家をリフォームして家賃を低く設定して住んでいるので
固定的な費用は問題ない状態。

このように、NHK の3つの課題「老後資金・学費・生活費」のうち
生活費と学費は何とかクリアできている。

問題は残る「老後資金」だが、それぞれ持ち家でベースが低いので
元気であれば何等かの労働をして行けば「年金」でも賄えるという感じだ。

例えば、私は自宅・事務所・実家と3件を所有しており、
それぞれ借金はないので固定資産税や管理費だけなので、
会社から相談役で頂く僅かな給料で生活が賄えており
余り多くはないが「年金」は貯蓄に回っている状態である。

つまり、「老後」という視点では「持ち家」と「健康」がキーであり
一人生活なので、余り贅沢をしなければ「ゆとり」がある状態で
確かに、自分のしたい事を楽しめている。

私は亡き妻が教員だったので、
子育て時代でもクルマやゴルフを堪能できたので他の方より
お金に苦労することはなかったが、
諸事情でサラリーマンを辞めて会社経営をしたので
景気変動で人件費に翻弄されて、見かけの所得があっても使えない
という状況で亡き妻に苦労かけたのも事実である。

紆余曲折を経験したが、現在は
三男が「AI」を武器にお客様の事業で一翼を担う貢献をしており
その先の超一流企業が盛況なので安定した取引が期待できて

当分の間、会社の経営が厳しくなる事はない状況なので
相談役と第一線から身をひいて自由なことをさせて頂いている状況。

「ふつうの暮らし」という事だが、息子たちはさておき
私の「老後生活」が「ふつうの暮らし」か否かと言えば、
周囲の方々と比較すると
まず、毎日出かける事務所があり半日過ごしており
さらに、年金以外の収入で生活が出来ており
しかも、「腎臓」の数値に問題があるが日常生活には支障がない
という具合なので、他者には「羨ましい」ような状況である。

若い時は「コンピュータをやりたい」と言って、
故福井社長に「道」を開いて頂いたし、
独立した際は友人が「PL法セミナーを手伝わないか」と誘ってくれて
自分の「一番商品」を見つけることが出来た
という「縁・運・つき」に恵まれてきた。

つまり、マクロに見れば「したいように生きて来た」という状況であり
何とか「幸運」を維持して今日に至っているという状況で
多分、このまま行ければ「よい人生」だったと感謝できる状況である。

3人の息子たちも、それぞれ「普通の暮らし」という曖昧な基準だが
多分、やって行けそうなので「中流」という域であり続けると思っており
感謝しながら老後を楽しく過ごしたいと思っている。